コミュニケーション力を
つけるための国語科ステップ

福岡県立柳河特別支援学校　教諭　田中　裕子

1　はじめに

（１）研究主題（テーマ）の設定理由

本校は、明治 41 年に柳河訓盲院として開校し、本年度 114 年目を迎える。その間、大正 13 年に柳河盲学校となり、平成 22 年度からは肢体不自由教育部門・病弱教育部門を含む３部門を併せもつ特別支援学校となった。母体が視覚障がい教育部門（以下「視覚部門」という。）とはいえ、年々幼児児童生徒の在籍は少なくなっており、視覚部門内で集団活動等を行うことも困難になっている。集団での経験の少なさに加え、視覚に障がいがあるため、会話中の相手の表情や反応がわかりにくい。そのため、反応を確かめながら会話を続ける自信がなく、積極的にコミュニケーションをとろうとする生徒は少ない。全国学力・学習状況調査の結果においても、中学校では、伝えたい内容や自分の考えについて根拠を明確にして書いたり話したりすることや、複数の資料から適切な情報を得てそれらを比較したり関連付けたりすること、文章を読んで根拠の明確さや論理の展開、表現の仕方等について評価することなどに課題があることが明らかになっている。

そこで、改めてコミュニケーション力をつけるための国語科の学習のあり方の見直し・改善について研究に取り組んだ。

（２）研究仮説

国語科の学習評価の観点は平成 29 年度から３観点となった。それは「知識及び技能」を習得して活用し、課題を解決するために必要な「思考力・判断力・表現力等」を育み、「主体的に学習に取り組む態度」を養うということである。

コミュニケーション力というと、表現力・主体性等が求められがちだが、「思考力・判断力・表現力等」や「主体的に学習に取り組む態度」を育てるには、生徒の「自信」が必要となってくる。そこで、「自信」をもつための「知識及び技能」の習得の仕方、「話すこと・聞くこと・書くこと・読むこと」のステップを工夫していくことにした。具体的な活動として、まず〔要約〕を手がかりに、他者を意識して「読み」から「書き」につなげる。次に〔紹介〕を手がかりに、他者を意識して「書き」から「話す」につなげるようにしていった。そうすることで、コミュニケーションに必要な「自信」をもつための「知識及び技能」を身につけることができると考えたのである。

（３）研究方法と評価方法

この研究で大切なのは、主体性をもたせるために、身近で生徒の関心のある教材を

活用することである。生徒の関心が高く得意とするものなど、実態を把握しながら教材を決め、実践していった。

また、学習は「目標を決め、実行し、評価を受け、新たな目標へ」という、サイクルの繰り返しによって行われる。そのため、どんな指導にも評価は不可欠である。具体的な評価を受けた生徒は、新たな目標をもつことができるからである。今回の評価については、１つめの〔要約〕では、担当教員の声かけに留まるが、２つめの〔紹介〕では、ポストに入れられた複数の人からの感想という形で行うことができた。

（４）研究計画

年度	期間	内容
R3	４月～５月 ６月～３月	生徒の実態把握、資料収集 授業実践・成果と課題
R4	４月～７月 ８月～３月	生徒の実態把握、授業実践・成果と課題 授業実践・成果と課題、研究のまとめ
R５	４月～７月	研究のまとめ

２　実践の概要

（１） 生徒の実態

本年度の視覚部門の中学部生徒は、１年生１名、２年生２名、３年生１名の４名で、盲２名と弱視２名である。今回継続して研究するため、R3 年度に１年生として入学した弱視生徒を対象とした。地域の小学校から本校の小学部に３年時に転入した、準ずる教育を受ける生徒である。本校に来てからは１人クラスで学習している。肢体不自由教育部門に１人同じ学年の生徒がいるが、限定された教科のみ一緒に学習している。

対象生徒の見えにくさで困ることについて聞き取りをした内容では、広い空間、壁のないところ、天井の高いところ、プールなどが不安であるとのことであった。また、遠くからの呼びかけは、自分を呼んでいるのかわからないため困る。地域の小学校で、自分だと思って返事をして笑われた経験もあり、臆病になってしまうようである。人とすれ違う際に伏し目がちになることが多いのも、自信喪失によるものである。

対象生徒は質問を向けられれば答えることができる。しかし、必要なのは「自ら」「進んで」「自主的に」行動することである。複数いるクラスと違い、１人クラスのため、研究の実施には不自然にならないように配慮する必要があった。そのため、活動の始まりは一見国語の授業とはあまり関係ないように思わせる工夫をした。

（２）国語学習の取り組み

「コミュニケーションに必要な〔自信〕をもつための活動」

ア　〔要約〕

新聞広告のキャッチコピーを使って要約を考えるということに取り組んだ。新聞１面分の大きさの広告の中で、目を引くイラストや写真・コピーのものを見つけては

教室の後ろの掲示板やホワイトボードに貼っていった。新聞広告のキャッチコピーとは、「伝えたいことのポイントを凝縮したもので、要約のようなものだ」と説明し、（要約の学習は授業で実施済み）「どんな意味だと思うか」と尋ねてみた。生徒はまず絵から想像し、言葉についてじっくり考えてから答えていた。次からは国語の授業前の休み時間に、新しい広告を声かけせずに黙って貼る（前の広告の上に重ねる）ようにした。すると、自分から寄ってきて読み上げ、「〇〇のこと？」などと考えるようになってきた。「正解！」と言われることが増え、新しい広告が貼られるのをさりげなく待つようになってきた。休み時間に広告をめくって前の広告を見る姿もあった。生徒に自主的に行動させるために気をつけたことは、さりげない掲示（定期的に新聞広告を教室に掲示する）。注目させたいときは、いつもと違う場所に掲示するなどであった。

例：ドラえもんのイラストを入れたユニクロの広告

例：「旅するドメイン」JPRS の広告

（国名、トップレベルドメイン、国のエピソードが 251 ヶ国分の一覧になっているもの）

「旅するドメイン」では、生徒は国名を読んでみたり、エピソードを読んでみたりしていた。また、気になった国は QR コードをタブレットで読み込んでみたりもした。

こうしてキャッチコピーを使って要約を考えることに取り組んだが、「キャッチコピーから内容を想像し、何を言いたいのかを考える」ことによって、何ができるようになるのか。それは他者からのメッセージの受け　取り方である。読み取り方（目次を見て内容を思い浮かべながら読める）、話の聞き取り方（項目を見て心の準備をして話を聞ける）などがわかるようになるのである。では、逆はどうなるのか。「伝える内容から要約を考える」。生徒は先にキャッチコピーがあると、「何だろう」と反応することに気づくので、キャッチコピーから内容を想像した手順を遡ることで、「話し方・話す工夫・話す順序」がわかるようになるのである。

この研究を進めるにあたって、キャッチコピーの基本について確認した。諸説あるが、キャッチコピーにはテクニックとして３つのポイントがある。

① 自分に関係あると思わせること

問いかける（見る者が自然と答えを探す）。ターゲットを絞る（まるで私のことと思える）。つぶやいてみる（見る者の気持ちを代弁して共感を得る）。

② 強い言葉にすること

シズル感がある（見た目や音など五感に訴える）。具体的な数字を使う（リアリティと信頼性アップ）。希少性を出す（一生に一度、〇個限定等）。

③ 相手に「何で」を作り出すこと

異質な言葉の組み合わせ（反対のことを組み合わせる）。～するな（なんでしたらダメなの？と疑問に思う）。

見る者がどう捉えるかを思い浮かべ、どう伝えるかを実によく考えた方法である。

そして良い話し方にも３つのポイントがある。それは、内容・態度・声である。

「内容」は、一文が短い、議題や結論を先に示す、具体例がある等。

「態度」は、内容に合わせた表情を見せる、姿勢が良い、肯定的な話し方等。
「声」は、聞き取りやすい音量に調整する、理解する余裕を与える間がある、
メリハリがある（高いと元気、低いと威厳、抑揚があるとポイントが分かる）、等。
つまり、これも相手のことを考えたコミュニケーションである。先ほど、〈キャッチコピーから内容を想像した手順を遡ることで、「話し方・話す工夫・話す順序」がわかるようになるのである。〉と述べたが、まさにこの方法は話し方と重なるということがわかった。

イ　〔紹介〕

得意なことを生かして自己発信が苦手な生徒を導くために、作品紹介の活動に取り組んだ。生徒は自己紹介が苦手である。しかし、作品紹介ならできるのではないかと提案し、得意なイラストを教室のドアに貼って展示した。感想を書いてもらう大きな付箋も一緒に用意した。出会う人ごとに声をかけられ、作品はほめられているのに、感想は少ない。どうしてなのか話し合った。展示の仕方に問題があるのではないかと思い当たる。展示の仕方を改良する際に、「〔見る人〕〔感想を書く人〕になったつもりで考えよう」アドバイスをする。

〈以下、現状と生徒の改良案〉

・何の展示かわかりにくい（イラスト展などの表示を入れる）
・書いた感想が貼られたままである。自分なら書いた感想を見られたくない。
（用紙を一筆箋に変え、感想を入れるポストとして大きな封筒を貼り付け、書いた感想が他の人に見られないようにする）
・好きなイラストがない人がいるのかもしれない（絵のリクエストを呼びかける）
・イラストのキャラクターを知らない人がいる（知らない人でも絵のことが分かる説明文をつける。作品の紹介のためのデータを集め、事実を並べるところから始める。）

今回は、得意なことを生かして自己発信が苦手な生徒を導くために、作品紹介の活動に取り組んだが、「誰でも感想が書きやすい展示にして作品を紹介する」ことによって、何ができるようになるのか。それは、他者へのメッセージの送り方がわかるようになるのである。つまり、ここでは「紹介の仕方・紹介の工夫・紹介の順序」（「書き方・書く工夫・書く順序」）がわかり、展示の仕方が改良されたのである。実際に新しい展示の仕方に変えてから、次々と感想がポストに入り、リクエストも続いている。イラストを描く気持ちも上がり、説明の仕方についても落ち着いて考えるようになってきた。キャッチコピーは見る者がどう捉えるかを思い浮かべ、どう伝えるかを実によく考えた方法だった。そして要約も紹介も、考え方や書き方や話し方を工夫した相手のことを考えたコミュニケーションの１つだったのである。これらの２つの活動を生徒は進んで行うようになった。やはり、興味関心のあるものへの行動はとても前向きであった。また、それらを通して、いろんな場合に応用できるのだということを理解したようであった。

３　まとめ

（１）成果と課題

成果としては、人前で発表したり、会話したりすることが苦手な生徒が、〔要約〕と〔紹介〕を通して、「話すこと」も「書くこと」も考え方は同じで、「やり方さえわかれば難しくないのだ」と感じることができたことである。また「前もって準備しておくと安心できる」と理解することができたことである。さらに、似たような内容のものがあれば、応用できることにも気付くことができた。

課題としては、今回の活動では「話す」ことの応用まで行き着くことができなかったため、今後は経験を積み重ねていかなければならないということである。また、応用力をつけるためにも、表現する機会を更に増やしていきたい。

国語の目指すものは自立して生きていくための力をつけていくことだと考える。国語は「何を」ではなく、論理的思考力で「どう話し、どう聞き、どう書き、どう読むか」が重要である。そして論理的思考力は「論理的思考の技術を使いこなすための能力」で、それを使って「話し、聞き、書き、読む」のである。そしてこの「技術」というのが「知識及び技能」に当たるとすると、この技術を身につけることこそ「自信」をつけるのに最も大切なものとなるはずである。

論理的思考力には

①言いかえる力（抽象・具体の関係を整理する力）

②比べる力（対比関係を整理する力）

③たどる力（因果関係を整理する力）

といった力がある。

特に①言いかえる力（抽象・具体の関係を整理する力）は重要な技術である。メッセージを発信する者と受信する者とが、意味内容をできるだけ「ありのままに」共有できるように言葉をすり合わせていく。これはコミュニケーションの本質である。例えば文章読解問題は、筆者・作者のメッセージをどれだけ「ありのままに」受けとめることができたかを試すもので、受信に必要な力は「言いかえる力」である。文章でも、図・表でも、「ありのままに」受信できたということを伝える（発信する）必要が出てくる。ここでも「言いかえる力」つまり、抽象・具体の関係を整理する力が必要となる。抽象化しても具体化しても、意味内容は同じで「ありのまま」でなくてはならないのである。今回の活動である〔要約〕はまさに「言いかえる力」であり、「抽象化と具体化」でもあったのである。

（２）今後の取組

ア　論理的思考力について

今後は今回学習した「言いかえる力」だけでなく、コミュニケーションの力をつけていくためにも、「比較する力」「たどる力」についての活動にも取り組んでいきたい。

イ　ICT の活用

ICT の活用は今後ますます必要とされるようになるが、現在まだまだ活用の仕方

が不十分である。研修し、活用方法の工夫に取り組んでいきたい。

【参考文献】

・中学校学習指導要領（平成 29 年告示）
・中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　国語編